

宇治拾遺物語 十五（江戸後期）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館

アチャカニシヤ

圭

宇治拾遺物語卷第十五目録

○清見原天皇と大友皇子合戦きよみのひらのてんのうとおほともじゆうしゆうごうせん乃事

○もろともさが胡人見もろともさがごじんみする事

○かく翁かくおき祭まつりめりそらそら武正ぶじやう並なが行ゆく内うち後ご代だい事

○丹部府生海賊射たんべふうじゆうかいぞくしゃ逃なが走はし事

○土佐判官代通とさばんがんだいつう清見原きよみのひら人邊ひとへ走はし用もち自じ殺ころすす事

○極樂ごくらく也僧施仁王經じゆう詔せう車

○伊良縁野世恒いらのゆゑいわ鷗あざめ沙門さもん下文しもぶみ乃事



八 相應和尚上都率天奉付深致后奉

新事

- 九 仁戒上人性生の事
十 秦始皇自天竺來僧禁獄事
十一 後乃千金の事
十二 盜跖と孔子同名れ事

今ハじつて天帝は龍也御子よ大友も御みどり人あらとありた政大臣もすうりて世乃すうりをもどもれくさんあらとあるから中に御門うせ御門も御門御門は御あるんとゆり行もる御門ももれてる鬼うれと死もも死うしてゆくアマモトあらのまくともとくを行まれたが、大モテ乃曾子の御門のまくもとくと御一せれやが、もいせひもあらうがりこれの言ふてありて勢もる金もだあ金もくせんとゆきうとねがて御門も御門も御門御門古御山内ゆきよ入る御門も御門もゆきうとゆきうあらうと行ぬうて死れたまもが寧み

人よりあまかき。其の事とて一聲かひよあたつて
虎耳羽をはきておどり前走りのあり。向まにそ
へくとむかひすゝれをかとや筋毛がまくとて
やる軍旗とのへく速きとてまづる風にて
そくおほひとてゆくとそくとゆくとゆく。乃
んともかくのまゝのまゝとてひまなれぬ女まゝを
きば又のうわせをとくとくとくとくとくとくと
いふてこゝ事つぎやくしとゆりをれどとくと
くうびくうりけゆがおとくとくとくとくとくと
やさかわらめくわくわくわくわくわくわくわ
く入まきとてまづうれうれまなれす

てまごで、そにあられねり。まことに、されども
まつりは、下船乃精良鷺と名前して、薬草販賣をす。
ま乃人ともあらず、是處を一人山と號して、まつりの庵より
下りて、所と山城坐す。まつりは、とて、ゆくをう
らむるを、あひて、自ら、そよぐ。松も、さかよけ、まつりは、
人あ半へきり、乃ち、あかく、わが、それぐる、佐々
栗と、金と、まつりて、まとも、あらわせ、まつりと、二三
せきうち、かかづ、あと、かくす、まつり、かくす、本にあき
とて、かくす、乃ち、まつり、まつり、行ぬ。里人、まつり、
かくす、かくす、あらわす、まつり、まつり、かくす、かくす、
志摩、まつり、まつり、まつり、まつり、まつり、まつり、

乃どかくもさうめりのませよと仰へておひそめに
ほゞよ水をくみまへせたりとておひそめに
きけりとゆつうにこひまのこはまんとて義理
へおもへぬとておまのとおまめあらとよあらとて
立行ひうまむにおれあらとおまめあらとて
よこひまうとすとておまめあらとておまめあらと
おやまう一はるたまもおおはくはくとくまのま
よそ。波乃船ともおれあらかくとておまめあらと
おまめあらとおまめあらとておまめあらとて
おまめあらとおまめあらとておまめあらとて

うりぐもてれがきゆくましゆてハハムシの
筋れわれ、女アキハヌモヘヌモヤウキムナサヌセヌ今
トモミタカケル一車んとソム。湯舟をノ川車に
あてて車下に舟を下すまで、上は布を繋りて
きて水をもつてあらぬうえを、ぐりあひて
其の三百人をうちまわらしめよ問くづくおきうち
人合ひもどりのとつとも女アキハヌモヤウキ人の
軍千人ぞうりきしてねそ一車のまほたまく、兵
へ入射ねんとすきが乃向かれるるもよりてとが
うぶくしてからだこのが勢つてハ追付路あると
も三軒うちを行あんと見ゆゆく軍をあわ

ソノアリて追路を先とされど、まことに思
くべしの如きが兵列れまあり。手はかゝられ
まひ乃ちよ軍をよそえんよおもむくと同様
されど、せうすとまくくされおほしとあらもの
を残してゆくと、則二三千人兵おまくさり。も
と引くて大伴皇子を追行ひ近ひに大伴とよ
そくよ追はくそくかくよ皇子の軍をきて、ち
こくよ追はく所にて大伴皇子は井出よ山崎
てうされ行くひとどきねられまくまく大輔
皇子也ちもくてせん佐よつけ行けり。田原ようづ
約一やまびりゆてくそくの形も變へぬ生がきり

まにそそく乃ちくそくをそそくまく。黒鹿の
事にてあくをそそぐ者ハ多賀氏乃ちのあり。あれ
うまく子孫を守りてあるはりすれども、そり
一揆よりてまて薬師もよあると。もあまく乃ち
不破乃の狀としてヨリレバもあととす。

今ハレアト胡事と云ひ唐も是なるがよかと
を奥州乃地は遠くたりやあんとて家作法師と
てはくしてありしきれうるをもすきりこひ家は又
の頼時とてみちのくの急びとてゆや金をす
もくうれをもくとてきのんとせられ多る所とよ
ひまへよとすまたのくらまてかかをせひらと
まうるのうりこれへもくとくとくへそを責む
乃くわきもほくくがくうひくはく地も
九の見ゆくとく地あんきりくうとくとくとてあり
さぬけみてかきわくとねつま風あふりれよま
アヘアラとくとくとくとくとくとく



まげ島舟一休とくひくはうれよへつてめきうる
人く新阿彌川乃源即ちる海の三井そへまく
じゆまく、船即あとも二十人をあう食牠酒船どれ
やくきてみ供せよてをれどくもきもぞく
らぬほくにえりこへびらきをりば、海のとおり、左右へ
もあうむるあ、東そあうくる。おがる川乃瀧を
えへきくても瀧か浦へよきもんかゆきとくを
きともんきともく陸よのやうねくきくらやあゆよみ
きれども人をもくとくはよのくわきくられ
ばくと人をすゑぬやあくと川とのやうくらよせり
のぼりとにまくとくきくらりくわきくら

ありまくとくひくはうれよへつてめきうる
人のまつれをせざまきう三十日あゆのやうとけみ
池乃源とくひくはうればく船をれあるてとくを
強くとてあくまにさうがくまとひくとくうと
あがく城乃くまくとく見をれと胡人とて繪よ壁をくふ
姿一きうものあかき地とてひゆいとてむにま
つまく打おきうあまとへづれをもくらとくとくと
うちたぐだすとくにがくとよもと河奈のとくと
あたまうとくもとてだく色とくねとくねとくねとく
とく河とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

もあがよれあへるもひつともとがくのれをばるに
乃つとせむるをかくすにて引はくまく波つゝる波
もそくめくらむるをするをみぬあたうとみくらむ日
ひくわがくはるよーどくも波あらしに川をき
もかきしてゆく波浪ちりきれとくくく人ゑく
乃ちにさくとせてこれぞが原、御くにうと舟を
もくねあらうてせんあらまがる行を候をうそで
をよがせけひにうんえうれよもとまて立ちけ
きく一ひ伏乃はるとくもくとくもくとくとくと
おうめーとそれうち波よあらまくとくとくとく
くそお時と共よけふまきと湖玉と日やひれの

西乃地とひまへあひくうあくうとやける
島あましまはひし雲巻乃とて下野武山泰萬
行成つも一キとくまうれくとけ性ち歎其事とよ
く出發すまことに武山並羽根下落宿んとくとく
てまことに引波うらくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あらとあきはあらかくまうねがてあるとあるとね
もまく南へくうこうとね波よ武山並さんとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

おもひてしのぎよ引きもはれど東、残る
ありをうぶつあくとあらまわして慢む冠せり
おうとみそく南、うらうけのばんくは残せら
きく乃へかきくがりとやれをもととつ

三毛色がまへじつむ乃府生とつ舍人あう
きもとくかく御ひさまうーくでそあらきるにまきだ
とこゑみて村をあたひあきのそれびよづな廢跡
あき板とねまくとくしてのまう書もみのあとと
きだとをれんとあれすうあきもとー路より船と
つともか氣をばくとまとくべすれも傳うう
ゆくとまてすばんとくとくしてつまき体をも

らぬとめのとうをひかくすもほくへおき板尺れ
うせぬぞそはせうまきまつばうとそも源をと段
つは様うほそく焼竹はよみき板とくうそれれ
あせやーれを乃くそまうれとつあれとるほとく板
おきとくせうまでとく前口と焼くそもれの蟲
よぬどうとけふが家正のんからうそひ残をあん
二乃やめをそくらそとせうんがとせのくのとくぞ
せれもあうあせ一まらほくあくつれてそく歴をと
す、射すとまくありてうー出そとくとく贈りづり
うそくほるは先くそくいせんば轂感あつてもとれ
お相撲乃使ひうそくわねすれお撲りもゆく備し

出ぬまへりばへておまへきて乃ばうけひにゆる
事といふれを海賊のあ源もるかむけり。むけほど
くよきももあはづて重すあまに詮諭とある。また
海賊のみどもよそひりきこへひくせを務め。また
之をばふとへ乃府生ひよがうとのごくまきまくす方
乃のうくあうともすま見えすとられく皮より賠
引れ時きうちける状表本多とぞくうるつとく
きて冠毛懸をとあるべき室う一筋の便衣をすと
ハ袖よきるをせ行ふ叶ふねまでも猪つきを下す
アヒとつうめとあひゆりうふもくらひつきとま
ぬきとめでうーろとまくしてが形ひうへよまく

つまへ定十おがよすりきよゆきようじや。後者ども大
サとわくやに及ばれどて。黄もをつきあひゆりひ
よがくもとだよそひりかどりど。定十六ふよしづき
きゆくれねくんとつぶどせようをやうへひくあ
きゆくにゆくらしてからばきくかくして志をくわ
くくらあがそれハ海賊が家とのものいふる。物
きてあうきあがき。ばれかたづれくとくもきくせ
くをまへほりてうけとまとくも。の府生まえず
して引きこりてとくとれちてうきを成してとく
きびころ矢自弓もみかくして家のかくうかくふ
とくへ入ぬやくを乃用よじてまきうちたり。

海が多御くひあひき代あぎよくはまを後
よそとリねえとねきてみるにうるそく敵を
しろと紀乃御うそをあらだりえくれ地うこ
重城こ乃満賊どもみく敵、靈へうちある天にあ
らさうとなり。神、坐もううきうとつのうそくをゆく
あきまくとねとてうきにあうとそとく門下府
生うもとくいよが、うがまうんあふ敵と
を門下うそく敵とつてく神うちれ治て、底き
つきくかきううと満賊をぞ死ひけるがとく
ちを除ひどかくめもゆく一けく満ようかばく
さればこの府生うとそとく敵とくをうけとく

高津口今ひゆ。太佑判官代通使とひまのち
せり。奇をすそく、涂氏授衣等とがうく人花乃下月
乃あとすだあうきうりゆゆすれおそれ。後徳
たる左大臣太内は範もむじるにうのとくと主筋
をきなれ。通使ひで、是が事にありあゆる思
くをうて破車にのりてゆく時どにあくより車
二三をがりして人のときもうごひぬあらう。左
左大臣乃わもあると思く。虎乃もふれを掣あ
きてああうとくそもくがせとあくよび
きてあねきまう。とく用白敷乃地へめらまく
あり。船くとくくはとく乃通使の状もうち

まそのをよせて東の庵の門をかりおと
してあとう乃所を通法あるとさへぞもあ
らもまづばかり見る所にて乞がるちにあり
はとくふじんむろとわうとすだねるのハモ
しゆこゝもありけりや

寺をもすはいじつて彌川蓋通云を政本をとや
人せからた事にとくの多く成所どもと庵は
そもか世よりある僧がとれまつねはうまつう
てとくあい乃うどをとをと歎中とくもとがう
きと爲よ極樂寺へ數乃造経へるもあう。そ乃ち
はもあらぶ僧を出のうせよとつみ也とかりまき

も金をめざすこれと並いためる僧乃久をの山もよ
金もく危きと多き歎乃はくとてとてあを歎うせ
行船も世よりあをとむとむとくともすとん
とて仁正院を立ちとて立ちりて破よきうとて和
まえがかりをとび中門乃わの廊のとみにとくゆう
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
極矣もれ僧かにびとて大とてやあをなめるとと
はゆ行ふある人中門の脇乃廊にひとやまれ
うと正方へとと停まゆくよ今とあるとと
とととととととととととととととととととととと

と見ゆる御毛衣も考あれ
毛衣も身に思へぬひてりすうとくがまうる
も僧もつまらぬうぬのをうぬのをうがだり
ぬううさうううううううううううううう
あうふうくやせぞ内へよし入よとて卧掛へる所
へりへりふしきに物をせわせらきにからくれ
もうううみこ乃僧先を除と乃氣氣え哉
タマト紙くくみを起ひんくあゆく思ひて
乃行脚くく林やう隣の裏よ雲縞一葉の鬼
がそれ鬼所を立ちておきよしにむかう
ゆくそくの童子がおもむきをもむくすう

アヘミテモモモモモモモモモモモモモモ
氣運うね何う乃童れくへどもうとぞれーくえ
樂もれうきあーくかくようせ行者とくう歎
ドて年未よんをみに日經とを知るも中門乃
モ紀よまくはく化念あく、あんをもて行ゆ侍
うの經の護持乃く金ませせてまうの惡鬼ども
を追拂侍るありとややもて夏三月くもくく
ちづのむかくうにみかれもされ候いそんとすも
ほもあうとてよけもとてかくませ行て掉くつ
しる清衣をもててかくを行もにゆて程く御ゆく
ヤセとほらうきび行ちばくうからうだく

僧俗のえりある者へは身を守る中門の脇より
とすたゞみかうつるかくひらくにゆきあか
むくとてそゑおほげよそれも人の行へ僧の津川
津川はよしぬをすりそくふる入るが終あるわ
あり毋の居してのうとハシベーとづくらめ
作人手本もあらむ

まほじく越あらゆ伴良縁のせ恒とふきの
あらとありどりきれくはすかの明け門よ物も
えもてねほりうまれをあまけ紹人とやは
経門よとがうげる女房あらじめのひをと
の旅とひきれどもれようあんとておあられい

がちこちよ地とのともりとあまうの路へ物やとあり
渡るにそぞせされねじ後くらくも入るゝ必ず
食されど食うてあきみちそむむぢか二三ちへ物と
いかねむありそくきてれりやしきゆうあとまく
ほくくらくあうけるほどに月はるくのまれも
せよをりいづきんざるそとまく念一きでまうされ
くさうあり一筋うにん乃つぎれい禮がくそよあら
れくまくいせくらればあくしゆ房は後金うこれ
きくとあくまくあまうりかの名美と百町をあ
え中にまかう嶺ありうきにそもてがうるめや
よそく色乃ソシ花あんうまなこくよをえをてゐ

てすへん物とどうもすしれくいねひふゞ文を
三れハ米二斗とすゞ一とあり金うそうせきゆ雪
てえれが夏よ半あまの暑よあひうそうそくせき
とくも木を落しもがくとおうてひそくおちこゑるも
のあくたまバ額と角からく同一ある地あむきよ
まかくよる地出東くひをあづきておう。これ薄下
文あく出來事とせよとぞする事はとて下文を
えてあまハ二斗といへとも一斗をもたまつまことな
つるもりとて一斗をくらせうきるがのまくにうき
あひてくらでうれ入くる儀装の來をほひす。一斗のき
どまうきうちご方石をもども只仰うそて一斗ハうせ

あきり御事御事もあくてこうよはねとくで
スカ儀装のれよとせよとづれあれを正乃うちに
ある御あまハ多うつみれとて末百石の免んをも
とづれとくとせせきり一斗とれと又そまくとてき
えつうれとくとくとせきりと思ふもあむける。終
よ百石うととせそれとまうせにあり儀装のうだる
正ねれわゆくとてそれとまうせにあり儀装のうだる
まく米一斗出来よきりあくて多うもとせぬ去
者とこそあつある。

いまはじり叢山垂動寺に相應和尚と云ふが
あきと山名山乃ぬよ葛川乃云渓と云ふ

色通く行給きうも浴りて不動のにやねたく
されと負く教卒の内院弥勸井の法許よつて
行給くとあ風うちよやされと極くかはせとお
とゑかくやあとせきへつてゆくへそら扇をあ
らんと仕きれも激乃扇にて水あそ扇くあれ
くぬ玉乃頭よりつて教卒天よりほりすすに
内院乃門の額より妙法蓮花とぞきそりの正勝
そくまきす室へ參入乃志には経文誦して入誦勝
きひのじとの経へいもるかよんじく相應の経
く氣この經讀ひよしんじよ誦じるがとくまきがれ
たてとの玉さては口惜事うやうをかわふ參入

かくにゆくは花経を誦りて乃ち參入にて持眞
経を萬川へづり行かれど汝坐て此行事ゆきうる
さて本尊乃坐すとて經を誦じ居くわちかきと
遂行きりとびへども不動もひつまたを動かむゆく
まほ等身の像うそくましくきの和尚やうに
寺務の効勤かくきれど深般入后地乗みあらぬ
相應和尚とよこつて御行者うて仰坐むりす
ハ花坐てにゆくを度則時彼よつまてとつとて中門よ
そくうぐくられ、かくまき僧の鬼のあくやうが信
法布を表すと唱乃平足矣とえきて大本懶み

念珠をねつゝて停まつてあがへきぬ
もを下の下種法師よしと見てそぞれにあらわす
あらわすかねやべととめくらであ階乃は
欄乃りとてキモヒガシとて下へあれ
階の東乃りとて欄の立るゝ押うたててあらう
きの家を寝敷の母乳みけ落びとくあがれと
あゑ時く鴻巣れあゆきとて和尚経にうぢかと
くとくとくにひねりあねりとてお印と色吹と竹吹
とくあがめんく身れ毛とせうてかがゆるまゝと
をあがめ坐衣二斗小笠と一はくまく鞠乃あと
在中よりとあ後び出させとあよく和尚乃あ

さりとお被坐すとてあらぐとて化くるとえぐ
肉へとてよひて和焉と坐まつてどくとも和尚が
ふくふく引いてひもひもひもひもひもひもひも
えよのひだもと先りとあざらきとあざりとはなす
ぞつとどもとくとくとくとくとくとくとくとくと
打そとまつぶとくとくとくとくとくとくとくと
くかー中門をまくと人をえくとひもひもひもひ
室を參りうちをとて投入に引まれてをれあと
内へ投入候のうち和尚まつちおもづくとてじ
まとも久く立ち腰ひくとてみにいをきく入らず
坐ねのひ投へきてのち法物をさみてあひうちさく

ひきうちの後は、宿泊あらきをうとて僧教より任へまく
宣下せし。あまごどもやうやうわざの事何事僧徒よめぎ
とてあつたまがその役をもられされど、京へ人を賄
うする所すうとてさうにまづくもろとけらどそ
あまをまはひつ。南京より仁戒と人との人あり
きらし山階もろ僧もろ才学も中ひある。板車の
御よ戯はる公をわうてゐを歩んとけふ。ほの
まの別あ與ふ僧教つうづう惜みて制して、さそ
か一竹を底。おひびく死の里がある人乃女を妻として
連まれて、人へ金くま金きをもちたり。人よあまね
くおもむとて、家八門よこひ女の頭よつてだまき

う、ぬよそちうひのう行とをうへてあさまへ
うかよあとがまう。う、ぼく物よまうねと人よもせ
じやせんちう。まうとせがまこの妻と相具へ。まう文
ようほくあとまう。堂よ入く。うとまう眠う。ま
してあまう。まかとて行のまう。こひあとを別。苟
僧教きてて、ゆくゆくとみくよびよせきれ。おひび
くあけて、葛下郷乃郡司うをよやうにまう。今隣
まど城邑然おだして只公中乃る公の御堅固より
きり。あに漆下郷乃郡司はよ一人よめ城うめてあか
くせうとまえあとをまう。あくきける庵に
まく衣食沐浴お供となぞ。まう一人足劍ひつて

この郡司支婦の種ひ病よ医を訪らんとてしたれ公
督主のねまへ郡司答ふて申うて事う候んとく貴
き口作ゆまことか金うに仕やキモリ一事ヤうんと思
事とありどつぶ何あとぞと云は候終りとせいうよ
うてウ値ヤベキとつれされど一人少くまうせても事
ハ知うよと命をさうとあてがんとあつまうだ
郡司は候せうてうへうへなり。まてゆはひて、或
冬雪あらま日善めまよと人郡司クニヨメ想
郡司もあらびく例乃ちもあまて食物下人ともいを
ひとあませば支婦よりうそだかうてうすせをも湯
あくとあまて伏ぬあらきハまうて郡司支婦とく難て

このいのちの経てにひとかじよと人乃布一郎ハあかみ
サトシタヒトガキアリ。アリの一家に毛篠ハニ
生ハ名をもと焼行をなうとおりある彦岐ハと、
山との行つまとも取あらるまであき行くと
郡司内拂つてきそり仰せと酒すみにてつる
腋あくのをもる上人あらかくやて打道ヤアシ
いまわき行さんとひづるゆう。まのほとに目を
ひそめまといひあくふそくハ種類もねまや
一と見くもうしてをとひづれどとあひのき
あきてえぞ西よ向端裏合掌うらまぢまでも死路アリ。
あきゆきさとむとむとむと。郡司支婦古井子を

第三十五
あらがうさんかきこせんもあらとあらがうさんあり。
あらがうさんがうづりまゐるは極くくわの遠ありを思
と思ふとほんとうにあらゆさんとやうどあら
まちうねくまゐるにすと熱月あらとく華きう
室をもあらとまつてゐるとぞ



つりなり。主を殺あへれ。秦始皇の代は天ちと
もて僧をまきたり。序門ある。まじてまきたり
がるものである。おとてからきてまきるが。僧
やてつまくべ。迦牟尼佛乃はすみより。法華と
もんそとをよもるが。又天と地とせり。不
ふせ。つとやあせば。出門をもせらむ。行てみの要
あうめであやへ。乃は聚つてあらう。私乃てい人
よせとあへり。行とまひ。出發すと。けむ。私とあ
ものとあまともあ。角きものも。うき。に。也す。
つる人感ふたれよ。まよ。うちかく。わ
か。とき。ひもんものとあらまし。もくさくのう。

とつれく人感ふたれよ。あへとうと。あはれてま
とつれく。うて。まきと宣旨をと。まれねば。御のほどの
もの宣旨あり。まきにまきくつとある。おとてまきにまき
くゆきて。戸にあまふ。おやうき。たゞ僧恩引ひあゆ
ゆく。おき。自詠。まきり。が。序叙迦牟尼。せき滅ぼ
する。まき。あ。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。
ト入まれ。天迦仏丈。おは。婆安。ア。紫磨。黄金の
えをと。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。
門とる。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。
まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。
乃は元にまき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。まき。おとて。

そる僧乃老と云ふらむやうな文字あるる
もとよりあらうて歟乃門ともいひゆうてこめ
らきとてんちく乃僧と申てりととげうえ
このとて山門のくからかうとせうとう
んうを取よつゝとつけま仏法をうして漢
はまうと見ゆ

まじめに身に仕事とつてありまう家
のあくまでまきよ乃食地をしぬまうて
せんあととつ人ありもうちれまくまづくふ
き村乃栗をこねあまうつまくみ日ありてせ
ざよのまく金をとふとひきがまくひき

あくまつまつまよすうのうれ栗とそよまくと
と乃ぐらむうべとつてば在す乃つとく所自ら
まゆしたあくいよすらゑあうとくわく、あ
き車代惣あくせくやまとまよせゆうとくわ
よ鮒一をこぐくもむくわくわくよあくと見て、う
くえをまくとくもとれあくよつとくう大鮒。鮒と
おにうれ鮒うとども、ああのつとくう河伯神の
使は江湖へ行まううきつとくとくの溝、
めちつうそもうけうとどめくききくとくをとく
をよと思ふとれつるさりとくまくとく
され今二三日あつては湖とくうふまく後あ

とくに伴侶として人の物をばあやく貯あらうと貯ひる
あらまのものばかりするもと二三十人あり、古にあふ
人皆が名づけ、もうちとアセキよめぬかとアラカヒテ
てまじによつて、ゆくゑいなをうとせよれすはあれねば
ほりくへんと良あらうと、尉面をそばかしむる者多
あるに、うちと遠近くうといふとくわくあいがうける
あらまくは教訓一とこゑさんと思ふと、うごこの金方を
説くわあと、あとのまう成るまでかわさう人のを
おきりする所とせへと行かねうと、よくあいこめ
くいえくをのまつやさんとおあく用ひたあ
とそれまでをだまつ年內をあらがうとつれす

したまんとだよこたとて、行くくれまんとつてす。
奥乃つとくまくはうとまて、あくまうまく、おこりは
一提そらのあくまくのとどくあくまくつて、うぶ
さてびんをとまき、一駄乃つれ、一と我身をうち
ねまうにまくのひからきのくえん、ゆく意が、まち
のそれとめ様さうに益あら、とぞうれくわれまくの
うろせんまんと、まき名を書こう
あまきをいまきびつと、をほうに、わく意が、ま
人あくまきのわくとだれ、うと、あくまくまくふ
うれがくに盜路どりまちとよまくわあらと、乃山あとあくま
せみくとあくのあ、まきのと、あくわきあくまく

乃云、^{ニシメ一三}「^{ニシメ一四}行はばかめりて、^{ニシメ一五}へんひづめの
金きり、かくもひまくにかくすがくはつう。だまと
ごく油うてをへまきよとをすれ、^{ニシメ一六}さきのよ
あくびぬくあとをあとめいとあるべたまとをあ
まれみ云あきれど人のゆく行をそむわむとの内
くくすれどとつゆはくじとあるあくび。うれす
あめうせんとおれうとつまとへひがめくす。よ
くとせんとくとをやさんとおとまめをとくら
く監臨がくとねるわたり門よきうちとを
きとあうとある地ちも跡と跡とあくべき
きと跡とくとをまなきて貴れ子などくあ

すんすうとキアヒトツアリテ、^{ニシメ一七}まくらもつうひと
のまくまとまく人あうあうあとすとてかくれを
人をく一ぬくとせくれをゆくゆきこれあつ
くよめれとくもくらひへつたくべへ所をまほゆく
らんとくふうりとせより、^{ニシメ一八}まくらもく庭に立く
まくらはせきはくうえとく、^{ニシメ一九}まくらとまくく監鑿
それもかくえんへよくはは、^{ニシメ二〇}こもれの事も遠れと
うつ月太よまくえんき、^{ニシメ二一}まくらとれをあだつうか
牙代りとれをかくしてゆくろ。監せきうのまくく
かくとあゆへひよそ半くわせといぐれふ
ニシメ二二

の経の跡を伏せしもとがくぐりてかう
落したまほねおとをまきめくらあつとまくらで名前
くくとおねじばき色をきくもとてあかむとれ
れもれぬへとつゞく人せにあら様の念理をうら
くゆるぬよもとくしのゆきととすの相あう夫
をつゝれ地をあみて定方をめえと一火窓を
ようやまくまでまつて下流あたきと人によきけ
とてはあくとすらもれあうおはよをくわする
れのゆく所ださうにあれどもとくすらの
南側をゆくゆく南うけきども終あきくらむり
されそくせん人ひよれよとくみとくとくがれ

トに志づれくつますうべきじくとくれあとよんとゆれ
くもとつるあとよふと花は藍波のうちを御う御う
してとくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
一堺案と一人乃津門せてもとまれゆきゆきと
きとくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
よがー三九人を傷夷取所ある。首陽山よゆせううえ野
をくうとれ才子に都面とすとあつた。ゆくゆく
あうとくものあつたまくゆく門すとてあがれきあれ
即あきこ草の波あらぬ。こ花をも解ふれぬあひを
とあめ先とよくまくはれにまくとびわらし房とれす

よかよごうらゆゆみやまくすがわきよとくとく
を多くはくれあくまくまくらゆどもれの我とのえをくい
もひまくへきせゆまこ本ゆりて冠て段とももてを
一せゆかうと人ゆをひからくとまるとての魯夷うつ
きわと波夷はまつてゆれとゆこうとねゆうふくまを
つと波やせゆがんぐくとくとくゆれと用ふべくと
ゆ財よりれのちくとくとくとくとくとくとくと
てつとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
せんれすまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

京師三條通升屋町

御書物所

出雲寺和泉掾

其書